

大原勝林院

江藤 澂 英

◇ 大 原 談 義

勅修御傳第十四卷に――

文治二年秋のころ、上人大原に渡り給ふ。東大寺の大勸進俊乘房重源、いまだ出離の道をおもひ定めざりけるを哀み給て、この由を告仰られたりければ、弟子三十餘人を相具して大原にむかふ。勝林院の丈六堂に會合す。上人方には、重源以下の弟子もそのかずあつまれり。法印の方には、門徒以下の碩學、ならびに大原の聖達坐しつらなれり。山門の衆徒をはじめて、見聞の人おほかりけり。論談往復するこゝ一日一夜なり。云々

世に「大原問答」或は「大原談義」にして人口に膾炙せらるゝものにして、元祖大師の芳躅中けに絢爛たる御事蹟の一頁をなすものである。

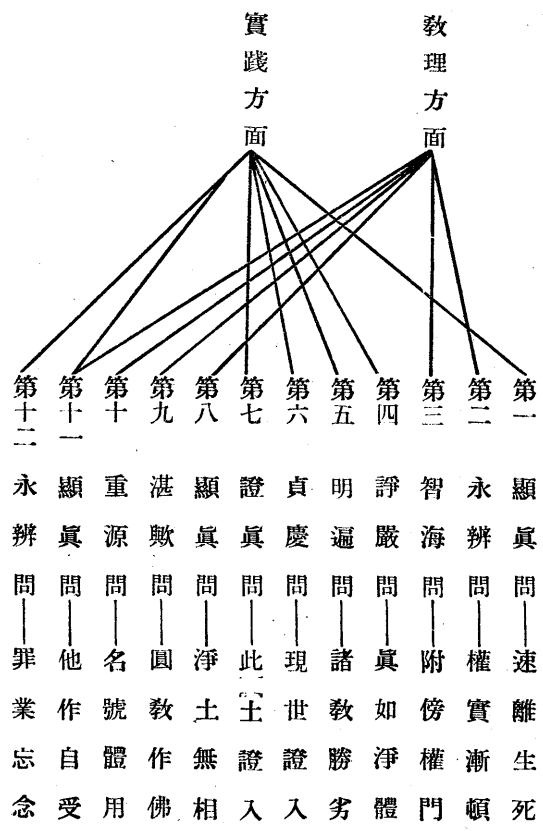
文治二年秋八月七日、天台座主權僧正顯眞法印は順次往生の大事を決せむがため、大原に大師を屈請し、法味を分つべく南都北嶺の高僧知識を併せて招聘した。會するもの證眞、靜嚴を初め山門の碩學三十餘人、南都の學匠二十餘人、其他覺行僧都、聖光房等諸宗の碩學高僧二百餘人、三井寺の公胤僧正は門下百餘人を率ゐて來り、大師は東大寺大勸進俊乘房重源等三十餘人を引具して來會し給ふた。

勝林院丈六堂の寶前に大師先づ肅々として歩を進ませ給へば、諸宗の碩德これに次いで入堂着座した。大師の側には――

機乗房以下三十餘人、顯真座主の方には永辨を初め、諸宗の方には明遍、貞慶、印西等の龍象が並びつらなつた。かくて談義は開始せられたが談論往復は實に一日一夜に及んだ。大師の説法は對辨懸河の瀉ぐが如く縱橫無礙、與奪自在にして法相、三論、華嚴、眞言、禪等の諸宗に亘つて凡夫の初心より佛果の極位に至るまで、修行の方軌、得度の相貌等つぶさに述べ給ふて、盡さざるなく、これ等の諸法何れも殊勝にして機法相應せば得脱疑ひなしに雖、源空如き頑愚のたぐひは如何せん其器に非ず、發心以後聖道の諸宗に就て廣く出離の要道を求むれ共、易修易行の法を得ざるは、時下り人愚にして機教全く相應せざるが故である。故に今善導の釋義、三部の妙典を體するに彌陀の願力を強縁とするが故に、有智無智を論ぜず、持戒破戒を擇ばず、無漏無生の國に生れて永く不退を證するこゝは是れ淨土の一門、念佛の一行なりとて法藏菩薩の因行より彌陀如來の果位に至る迄、理をきわめ辭をつくして説き終られた。而してこれ涯分の自證を述ぶる計りなり、全く上機の解行を防ぐる意に非ずと宣言し給へば、滿座の大衆肅然として聲なく、諸宗の碩德靡然として風に向ふが如く信伏し、竊かに自己の機根を省顧しては大師の慈教に感泣して、「形を見れば源空上人、誠には彌陀如來の應現か」と感歎し合ふばかりであつた。かくて顯真座主は自ら立つて香爐を手にし、高唱念佛を初め行道の先頭をつとむれば、大衆同音に之に和し連續三日三夜に及び、こゝは山谷にみち、ひゞきは林野をうごかして殊勝實に譬ふるにものがなかつたといふ。

大原談義の狀は勅傳第十四卷に舜昌師がその始終を麗筆を以て寫してゐる。また談義の席に親しく列したといふ、安居院聖覺法師の撰として大原談義聞書鈔なるものがその詳細を録してゐる。本書の眞偽については議論があるが今その問答として掲ぐるものは左の十二である。

◇ 勝 林 院



名稱 魚山 勝林院

別名 證據堂、大原寺

所屬 天台宗 別格寺

位置 京都府愛宕郡大原村大字大原小字勝林院

「小原女や野分にむかふか、へ帯」(その女)

翠黛山陰、高野川の清流を發する大原魚山の里は、古來小原女の雅趣を以て知られてゐる。それにもましてわれ等には「大原談義」の古事に多くの關心が持たされる。

大原勝林院——寺は清流妙音を讚える呂川に架せる魚山橋を渡り、三千院を右に見て行けば、熊谷入道腰掛石があり熊谷の鉦捨籤ミ傳ふる數本の竹があり、更に津川に架せる萱穂橋を越ゆれば、人皇第八十二代後鳥羽天皇、第八十四代順德天皇の大原法華堂の御陵がありて本堂の前に達する。本堂は桁行九間、梁行八間、柿葺の豪壯なる建物である。堂前の左右には木槲樹ミ菩提樹の二本が相對して茂つてゐる。四圍を案ずれば東は比叡を介して滋賀縣坂本村及び仰木村に對し。南は約三里にして京都市に接し、其間電車ミ自動車を以て連絡してゐる。西は江生峠、鞍馬峠を越へて鞍馬に至る、この行程約二里である。北は敦賀街道に依り、大溝、今津を経て若狹に通ず、行程約十七里である。

堂内正面に安置せる本尊證據阿彌陀如來は丈六坐像にして、立像の不動明王ミ毘沙門天を脇士ミしてゐる。現在の本尊は佛師香雲の作であつて徳川中期の作であるが、寺傳に依れば胎内に慈覺大師ミ惠心僧都の作になる小佛を祀るこいふてゐる。堂内西側壇なる御厨子中には木彫坐像の法然上人が安置してあるが最近の作物である。

勝林院の事由については同寺の取調帳には次の如く記載してある。

「當院は比叡山の別院にして文德天皇仁壽年間慈覺大師の開創なり。其山を魚山ミ稱するは唐土天台山の西北に支山あり、以て魚山ミいふ。聲明梵唄流傳の招據なり。蓋し慈覺大師入唐聲明秘曲の源底を究め、彼の魚山に比して更に當山を草創し、四十九院の佛閣を建て始めて無作の妙韻を擴充し、以て本邦聲明音律紹隆の本所ミす。中興少將入道寂源法師長和二年發心止住の道場を開かんミ欲し、北舊幽闕の處を尋ね帝京の頃叡岳の乾に當り、一堂を建立し六時行道す。一日毘沙門天、天蓋を執て後に從へり。尙相傳には紫雲に乗じて現身往詣すミ云へり。即ち此堂を號して勝林

院といふ。院内現在三ヶ坊の保守管理する本堂なり。加之源公所領の土田を以て堂院に施入し、永く支住僧の資縁とし、専ら聲明音曲の奥蹟を興隆す。然り而して本尊證據阿彌陀ミ唱ふるは、寛仁四年中興寂源法師台嶺の碩學を請じて法華八講を修す。覺超遍救の兩先德、佛果空不空の義を立論す。此時當本尊親しく空不空の現證を示して中道實相の本意を顯し給ふ。因て世に證據阿彌陀ミ唱へ、又は空不空の彌陀ミも稱す。古來皇室に御由緒多きを以て御朱印高六十七石を賜ふ。後鳥羽順德兩帝の御陵當院内に屬しあり、故に従前保守奉仕の任を茅なす。文明八年御花園帝七回御忌清涼殿に於て御懺法講執行せらるべきの處、皇居流火のため回祿に付同年勅額の儀式を當本堂に移させらる。

是より先き應永年度以來明治革新の際に至る迄、禁中御法會行はせらる毎に關山の住侶舉て參勤す。』云々ミこれに依て見れば勝林院は中古寂源法師の開創にかゝるものにして、大原名所記に依れば丈六の阿彌陀如來像は佛工康尙の刻彫なりミ云ひ、佛工系圖には定朝法橋が父康尙の命をうけて作るミ云ふてゐる。康尙は光孝天皇の裔是忠親王四代の孫である。而して長和二年に寂源法師がこの本尊を安置して當院を創したといふが、寂源法師は左大臣源雅信の子にして、俗名は時信といひ池上の皇慶阿闍梨に従ふて落髮受具し、顯密の法を學んだ人である。示寂の年時及び壽を缺いでゐる。(元亨釋書、本朝高僧傳)

而してこの丈六佛を證據の如來ミ稱することは、往昔山門の惠心檀那の兩流の徒衆が、この堂に集合して佛果の不空を論議せる時、慧心流には都卒の僧都覺超が不空の義を立て、檀那流には靜慮院の阿闍梨遍救が空の義を立て、互に相争ふたが、本尊阿彌陀如來は中道實相こそ我本意なりミて、空の義には相好を顯現し給ひ、不空の義には之を收め給ふたミのこゝでこれに起因して證據如來の稱がある。かゝる由緒ある佛像前に於て、文治二年の秋聖淨二門の大談義が行はれたといふこゝも、亦所以なきこゝではないであらう。

かくの如く大原勝林院は文治二年(皇紀一八四六)に先立つこゝ百七十餘年前、長和二年(皇紀一六七二)に開創せられ

暹救(皇紀一六四三)覺超(皇紀一六八八)の兩先德に依てすでに談義の前例があるので、本邦に於ける談義の道場として
は古き史蹟ニ云はねばならぬ。

而して現在の勝林院並びに證據の阿彌陀如來は往時のそれではないのである。その後幾多の變遷があつたらしいが、
現存のものは安永七年の建立にかゝるもので、本堂正面右方なる擬寶珠の鏤刻銘に依れば、寛永ニ元文ニ兩度に炎上し
たことが察せられる。その銘文は左の如く記されてある。

『山城國愛宕郡魚山大原寺勝林院證據阿彌陀堂者、寛永年中因春日局御願、爲崇源院殿御冥福將軍家御建立也、元文
元年丙辰正月炎上矣、諸衆雖謀再建資財之少而事難成、于茲明和四年以寛永年中御建立之故、言上公府仰願御助成之
處、蒙募衆人助緣而可爲建立資財之嚴命、因茲於難波津七ヶ年間募衆緣之所、助緣資財月々集年々積而建立如斯成就
畢、時安永七年戊戌六月記』

これに依て見れば現在の本堂は元文元年(皇紀二三九六)に炎上せるものが、四十餘年の長年月を経たる後、漸く安永
七年(皇紀二四三八)に至つて復興せられたのである。無論本尊證據の如來も大師當時のものでなく、前述の如く現在の
ものは佛工香雲なるもの、作である。

◇ 結 語

——あみだ佛にそむるこゝろの色にいでば

秋のこづゑのたぐひならまし

大原勝林院——は元祖大師二十五靈場の隨一、第二十一番の聖蹟である。八瀬大原の郷、これぞ洛北の名勝、翠巒高
くそびえ、山容相逼るこころ、滄々たる高野の清流は不斷の梵唄を奏してゐる。春宵大原野をこむる霞、秋日木々を染

むる紅葉、四季の眺めは更なり、一木一石にも溢る、が如き史蹟の數々、來迎院、寂光院、三千院、さては古知谷阿彌陀寺等、附近また名刹が少くない。京都市の一角、田中柳より叡山電車に身を托すれば直ちに八瀨に着す。更に自動車を利用すれば、靈蹟の參拜には至つて便利である。

大原談義——われ等は七百年前、群る諸宗の碩學大徳を前にして、玲瓏玉の如き元祖大師が、彌陀本願の念佛を高調して、「法門は互角なりと雖、機根くらべには源空勝ちたり」云、嚴然云ひ放ち給ひし雄々しいみ姿を偲び奉つては、勝林院の丈六堂、證據如來の尊像のみ前に低頭合掌、無限の法悦に浸るのである。